戦後81年

この感想文集は
連合静岡のホームページからも⇒
ご覧いただけます

連合静岡
2026 平和行動
感想文集





戦後８１年。語り繋ごう、「平和」を。



連合静岡



― もくじ ―

P.０３～P.１５　沖縄行動

P.１６～P.３０　広島行動

P.３１～P.４４　長崎行動

P.４５～P.５９　根室行動

今年は戦後８１年です。連合は世界の恒久平和の実現に向けて、より一層平和運動に力を注いでいます。ところが、戦争の悲惨さを実体験として語り、平和の尊さを伝える「語り部」がすでに８０歳を超え、その体験を直接次世代に語り継ぐことが難しくなってきています。

連合静岡は今年も平和４行動へ４８名の団員を送り、直接現地を訪問することでしか気づくことができない戦争の悲惨さや平和の尊さを肌で感じてきました。

また今年も、広島・長崎では、連合静岡独自の活動として、被爆者による「語り部講話」を実施し、「次代へ語りつぐ」ことに重点をおきました。

これらの活動を通して団員一人ひとりが様々な実体験とともに、「今」を生きる私たちがすべきことは何かを考えるきっかけになったはずです。

今もなお世界の各地で尊い命が奪われる惨劇が繰り返されています。連合静岡はこれからも世界の恒久平和を祈り、そして戦争を二度と繰り返してはならないことを語り継いでまいります。





※広島・長崎に持参し献納した折り鶴は、今回も地協のみなさんが心から恒久平和を祈って折っていただいたものです。

平和行動 in 沖縄

日程：２０２６年6月２２日（月）～２５日（木）

６月２３日は、１９７４年に制定された沖縄県の条例により、戦没者の霊を慰めるための「慰霊の日」と定められています。太平洋戦争で日本唯一の地上戦が行われた沖縄戦。その痛ましい傷跡を目の当たりにした団員は、戦争による惨禍が再び起こることのないよう、人類普遍の願いである恒久平和を願い、祈りを捧げてまいりました。



■参加者一覧　　※参加者属性は参加当時のものです。

号	区分	地域協議会名	氏　名	構成組織	単組名
1	団長	–	角山　雅典		連合静岡
2	団員	地協			
3	団員	地協			
4	団員	地協			
5	団員	地協			
6	団員	地協			
7	団員	地協			
8	団員	地協			
9	団員	地協			
10	団員	構成組織			
11	団員	構成組織			
12	事務局	–			連合静岡

団 長

2026連合平和行動 in 沖縄に参加して

連合静岡　角山 雅典

令和8年6月22日(月)～25日(木)に掛け、「2026連合平和行動in沖縄」に、団長として13名の仲間と共に参加してきました。私自身、沖縄の地に足を運ぶのは初めてであり、これまで想像でしかなかった沖縄の真っ青な空や海を目の当たりにし、その自然豊かな環境とは裏腹に過去この地で何があったのか、糸数アブチラガマでのガイドさんからの話や、旧海軍司令壕、ひめゆりの塔、平和記念公園・資料館などを視察しながら、当時の悲惨な爪痕や惨劇、非人間性の実相を学ぶ中で、時には身震いするほどの想いに浸るときもありました。

23日(火)は81年前の沖縄戦の犠牲者を追悼する「慰霊の日」でもあり、太平洋戦争末期の沖縄戦で上陸した米軍と日本軍の激しい地上戦が行われ、約20万人もの尊い命が奪われたことを知り、沖縄戦で犠牲となられた全ての人々に心から哀悼の意を捧げるとともに、24日(水)の集会後の1.3kmにもおよぶデモ行進では、「米軍基地の整理・縮小」、「日米地位協定の抜本見直し」、「米兵や基地に由来する事件・事故の根絶」を参加者全員で声を張り上げながら訴えてきました。

戦後81年経過したいま、世界を見渡せば、ロシアによるウクライナへの侵略は4年以上にもおよび、今年2月から、アメリカ・イスラエルによるイラン攻撃が始まり、未だ不透明な状況が続いています。81年前、沖縄戦で行きたくても死ぬしかなかった先人たちの思いを受け、今を生きる私たちが次世代に何を伝えるべきなのか、これからどのような未来を描いていくのかを示すことが、私たちに課せられた責任ではないでしょうか。

『平和と民主主義なくして労働運動なし!』この言葉に込められた想いを心に刻み、恒久平和の実現に向け、平和運動の重要性を改めて確認することができました。

最後に、今回、このような貴重な機会を与えて頂きました仲間の皆さま、そして、参加頂いた11名の同志の皆さんとの交流が図られたこと、さらには、事前の準備から現地での添乗などお世話になりました、㈱静岡ユニオントラベル　　様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



平和について考える

地域協議会



今回「連合 2026 平和行動 in 沖縄」へ参加させていただきました。沖縄に到着し、最初に訪れたのは「アブチラガマ」でした。アブチラガマは全長 270M もあり、当初は住民の避難場所や軍の地下陣地・倉庫として使用されていましたが、戦場が南下するにつれ陸軍病院の分室となり、600 名の負傷兵が運び込まれました。その後、撤退命令が出されましたが、重傷患者は置き去りにされ、ほとんどの方が亡くなったと説明を聞きました。私たちもガマの中を歩きましたが、懐中電灯がないと本当に真っ暗で何も見えない状況でした。この中に 600 名もの重傷患者がいたという状況を考えると、いかに悲惨な状況であったかは想像に堪えません。

翌日はピースフィールドワークとして、「嘉手納高台」「ひめゆりの塔」「平和記念公園」等をピースガイドの方と共に回らせていただき、沖縄の今と戦時中の状況を確認しました。当時、那覇の市街地の 90%を米軍の艦砲射撃や空爆により焼失したと聞き、住民は逃げる場所が無い状況だったようです。当時の方たちの恐怖がどのようなものだったか、今の私達には想像もできません。この戦争で約 20 万人の方がお亡くなりになりました。人が人としての尊厳を失う、これが戦争の一番怖いところだと感じました。平和記念公園では、慰霊碑に追悼の意をささげ、今の平和な状況をご報告させていただきました。

今回の平和行動を通し、改めて戦争の怖さ・悲惨さを学び、今の平和な状況がいかに大事であるかを再認識することが出来ました。何度でも言いますが、“戦争を決して行ってはなりません”。地協の仲間にも今回の内容をしっかりと伝えるとともに、「百聞は一見にしかず」とありますので、是非自分の目で見ていただくよう、次回の平和行動へ参加いただくことを勧めてまいります。最後となりますが、当日、我々を案内いただいたピースガイドの皆さん、連合の仲間のみなさん、本当にありがとうございました『感謝』。

平和行動 in 沖縄への参加について

地域協議会

1　沖縄戦に対するこれまでの認識

太平洋戦争については、これまで観てきた映画（火垂るの墓、硫黄島の戦い、ひめゆりの塔）や、終戦記念日のTV特集等により、主に米軍による空襲や原子爆弾投下といった、民間人の「被害的な一面」しか知りませんでした。

恥ずかしながら、「何故沖縄が地上戦の舞台になったのか」「何故民間人がこんなにも犠牲になったのか」や「太平洋戦争とはそもそも何だったのか」等、無知なことが多く、平和行動の全体像（沖縄→広島→長崎→根室）も理解していませんでした。

2　日本で唯一の地上戦が行われた現場を見て

糸数アブチラガマを見学させていただき、隠れながらの戦闘から、当時日本の劣勢さがよく理解できました。

沖縄はあくまで「ゲリラ戦」で時間稼ぎが目的であること、本来であれば、軍関係者（兵士）のみがこの戦争に参加するべきはずなのに、何の罪もない、何も知らされていない民間人を巻き込み凄惨な現場であったことがよく分かりました。

民間人からしてみたら、日本軍・米軍双方から追い詰められ、逃げ場がなく、希望の光も見えない「ガマ」の中だったんだと容易に想像できました。

3　平和記念公園、資料館

平和記念公園、資料館では、戦争で亡くなった方のお名前（25万人）が刻まれている平和の礎や、当時の着物、暮らしの道具類が展示されており、改めて、人々が暮らしていた場所で殺し合いが行われていたんだなと痛感しました。



また、沖縄県民のみならず、全国各地から兵隊を集め、戦死した方も多くいたため、各都道府県慰霊塔も建てられており、まさに日本全体を巻き込んだ戦争だったんだなと認識しました。

4　まとめ

沖縄は自然、美食、アクティビティーと日本有数の観光地でありながら、81年前には凄惨な地上戦を展開した島であることを改めて勉強させていただきました。

個人的に感じたことですが、沖縄は夜の街並みは特に賑やかく、戦争という暗い歴史があるからこそ、その反動みたいなもので、島全体に活気があるのかなと思いました。



反面、今なお残る基地の問題、日米地位協定等、終戦81年経った今も、戦争に由来する物事は継続しているのだなと思いました。

沖縄、広島、長崎、根室と、平和行動に関する地域について、自発的に勉強してみようと思える平和行動となりました。

5 その他

ひめゆりの塔や、平和祈念資料館等、1時間くらいのコースでしたが、資料の多さ、映像の時間等、個人的には時間が足りなく、資料館等は2～3時間確保した方が良いと感じました。





「2026 平和行動 in 沖縄」

地域協議会

2026 連合平和行動 in 沖縄に参加し、沖縄戦の実相と平和の尊さについて改めて深く考える貴重な機会となりました。これまで戦争については祖母の話や映像などで学ぶ機会はありましたが、実際に沖縄の戦跡を訪れ、現地で説明を受けることで、戦争の悲惨さをより身近なものとして感じることができました。

二日目に見学した糸数壕（アブチラガマ）では、暗く狭い壕内を歩きながら、当時多くの住民や負傷兵が置かれていた過酷な状況について学びました。現地ガイドの説明を聞きながら、戦争が人々の日常や命を奪った現実を改めて実感しました。

また、平和オキナワ集会では、平和を次世代へ伝えていくことの重要性や、我々が後世に繋げていく役割について学ぶことができました。三日目のピースフィールドワークでは、ひめゆりの塔や平和祈念公園、旧海軍司令部壕などを訪れました。特にひめゆりの塔では、学徒隊として動員された女子学生たちが看護活動に従事しながら多くの命を失った事実に大きな衝撃を受けました。本来であれば夢や希望を持って学校生活を送っていた若者たちが戦争によって将来を奪われたことに胸が痛み、平和な社会の大切さを強く感じました。

今回の参加を通じて、平和は当たり前のものではなく、多くの犠牲の上に成り立っていることを改めて認識しました。今後は今回の経験や学びを職場や組合活動の中で共有し、平和の大切さを伝えていきたいと思います。また、平和学習や平和活動に積極的に参加し、次世代へ平和の尊さを継承していく役割を果たしていきたいと考えています。



「2026 平和行動 in 沖縄」

地域協議会

2026平和行動では、戦争の悲惨さと平和の尊さについて深く考える機会となった。特に糸数壕（アブチラガマ）では、実際にガマの中へ入り、暗く狭い空間で多くの住民や負傷兵が避難生活を送り、命を落としたという説明を受けた。現地の空気を肌で感じることで、戦争は人々の日常や命を一瞬で奪うものであり、そのむごさを強く実感した。

また、嘉数高台を見学し、眼下に広がる普天間基地を見渡した。基地が地域にもたらす経済効果がある一方で、航空機の騒音や事故への不安など、住民が抱える問題も大きいことを学んだ。平和を守るためには安全保障だけでなく、地域住民の暮らしや安心との両立について考える必要があると感じた。

ひめゆりの塔・資料館では、学徒として戦場に動員された少女たちの過酷な体験を知り、戦争によって未来ある若者の命や夢が奪われた現実に胸が締め付けられた。あらためて、戦争は決して行うべきものではなく、二度と繰り返してはならないと強く思った。さらに、語り部の方が「戦争で亡くなった方やその親族に申し訳なくて、戦争を語れない」という言葉が特に印象に残った。その言葉には、体験を伝えることの難しさや、犠牲になった人々への深い思いが込められており、戦争を知る私たちも軽々しく語るのではなく、一人ひとりの命の重みを受け止めながら平和について考え続ける責任があると感じた。

平和記念公園では、平和の波を象徴する「平和の礎」が心に残った。国籍や軍人・民間人を問わず、戦争で亡くなったすべての人々の名前が刻まれていることに、平和への強い願いを感じた。今回の平和行動で学んだことを忘れず、戦争の悲劇を次の世代へ伝え、平和な社会の実現に向けて自分にできることを考え、行動していきたい。





「2026 年連合平和行動 in 沖縄」に参加して

地域協議会

今回の平和行動では、沖縄戦の歴史や現在も続く基地問題について学び、平和の尊さと戦争の悲惨さを改めて考える貴重な機会となりました。

特に印象に残ったのは、糸数壕（アブチラガマ）の見学です。実際にガマへ足を踏み入れると、暗く狭い空間は想像以上に息苦しく、当時ここが野戦病院として多くの負傷兵や住民の避難場所となっていたことを思うと、胸が締め付けられる思いでした。説明を聞きながら歩くことで、戦争は教科書だけでは決して伝わらない現実があることを強く実感しました。

また、ひめゆりの塔や平和祈念公園では、多くの尊い命が失われた事実を目の当たりにし、平和な日常は多くの犠牲の上に築かれていることを改めて認識しました。さらに、平和オキナワ集会では、沖縄が現在も抱える基地問題や日米地位協定について学び、平和とは戦争がない状態だけではなく、安心して暮らせる社会を築くことでもあると感じました。

今回の平和行動を通じて、戦争の歴史を正しく学び、その教訓を次の世代へ伝えていくことの大切さを改めて実感しました。この経験を一過性のものにせず、平和について考え続け、自分にできることを行動に移していきたいと思います。



現地で感じた平和と、考え続ける責任

地域協議会

私は、自身の音楽活動の中で特攻隊の悲劇を題材にした楽曲を製作するなど、これまでも自分なりに戦争と平和について考え、行動してきました。一方で今回の平和行動に対しては、正直なところ「平和」という言葉のもとに、あらかじめ用意された結論へ導かれる場なのではないかという警戒心もありました。しかし、実際に沖縄の地を歩き、その思いは良い意味で大きく揺さぶられることとなりました。

特にアブチラガマでの体験は、今回もっとも強く心に残っています。光の入らない暗闇、足元の悪さ、息苦しいほどの閉塞感。その中に多くの人が身を寄せ、傷つき、命を落としていったという事実は、知識として知る戦争とはまったく違う重さで迫ってきました。ひめゆりの少女たちがそこに動員されていたこと、負傷兵が運び込まれ、多くが生きて出られなかったことを聞き、胸にくさびを打ち込まれたような感覚を覚えました。

翌日のフィールドワークでは、嘉数高台、旧海軍司令部壕、ひめゆりの塔・資料館、平和祈念公園、魂魄之塔を巡りました。戦線の流れに沿って南へ南へとたどることで、沖縄戦が人々をどのように追い詰めていったのかを、点ではなく線として理解できました。特に、娘とそう変わらない年齢の少女たちが戦場に動員され、命を落とした事実には、親としても強く胸を締め付けられました。いつか自分の子どもたちにも、この地を歩かせたいと感じました。

一方で、三日目のデモ行進（のシュプレヒコールの内容）には複雑な思いも残りました。米軍基地の整理縮小や日米地位協定の見直しは、沖縄の基地負担を考えれば重要な課題だと思います。しかし、平和を本気で考えるなら、安全保障や抑止力、敗戦国としての歴史、現地で働く人の安全などを含めて、多角的に議論する必要があるのではないでしょうか。史跡から得た深い学びが、すぐに特定の主張へ接続されることには、もう一段の対話や納得感が必要だと感じました。





今回の平和行動は、現地で学ぶことの大切さを実感できる、本当に価値のある機会でした。だからこそ連合の平和行動には、特定の答えを唱和するだけでなく、異なる立場の参加者も自分の頭で考え、職場や家庭へ持ち帰れる学びの場へ、さらに発展してほしいと思います。私自身も、今回の平和行動で感じた痛みを忘れず、組合活動や自身の音楽活動を通じて、平和について考え続けるきっかけを周囲に届けていきたいと決意しました。

2026 平和行動 in 沖縄

地域協議会



ピースフィールドワークでは、嘉数高台や旧海軍司令部壕、ひめゆりの塔・資料館、平和記念公園などを巡り、沖縄戦の実相と現在に至る課題について学びました。

バスでの移動中で説明いただいた方の祖母は、戦争体験者で「おばぁは、戦時中の辛かった話、悲しかった話は何も話さず、どんな時でもいつも強く、いつでも笑顔でした。それは辛く苦しく悲しい経験をしてきたからこその現われでした。」という言葉が心に深く残っています。その言葉には、過酷な時代を生き抜いてこられた方々の静かな強さと優しさが表れているように感じました。

別日に見学した糸数壕（アブチラガマ）では、暗く湿った壕内に身を置き、当時多くの人々が恐怖の中で身を寄せ合いながら過ごしていた状況に重く心に響きました。

限られた環境の中で、いつ命を落とすかわからない不安と向き合いながら過ごしていた日々は、言葉では言い尽くせないほどの苦しさであったと感じます。

その後、ひめゆりの資料や証言に触れたことで、戦況の流れとともに人々が追い込まれていく過程がより現実のものとして心に重なり、胸が熱くなる思いでした。

さらに、平和オキナワ集会では、米軍による事件やヘリコプター墜落事故、普天間飛行場移設問題など、現在も続く課題について話を伺い、平和が決して過去のものではないことを改めて感じました。

こうした歴史と今をつなぐ学びを通じて、多くの尊い命と経験の積み重ねの上に、現在の沖縄、そして私たちの日常があることを実感しました。

経験された方の証言を基に、思いを感じた事を大切にし、私なりの伝え方で正解なのか不正解なのかは解りませんが、これからも平和の尊さについて、伝え行動して行こうと思います。





「当たり前ではない今」を生きる責任　～沖縄で知った犠牲の重み～

地域協議会

「2026連合平和行動in沖縄」へ参加させていただき、命の尊さと平和の重みを深く学ぶ極めて貴重な機会となりました。

行動1日目はアブチラガマや首里城公園、平和集会を訪れ、2日目はピースフィールドワークにて、嘉数高台や旧海軍司令部壕、ひめゆりの塔、魂魄之塔、平和祈念公園を巡り、米軍基地の整理・縮小と、日米地位協定の抜本見直しを求める集会・デモ行進に参加しました。

行動の中で最も心に深く残ったのは、ひめゆりの塔と資料館です。自分の子どもほどの年齢の多くの女学生たちが沖縄戦で命を落とした現実に、胸が強く締め付けられました。一人ひとりの顔写真や性格、どのような最期を迎えたかが克明に記された展示は、涙なしには見ることができませんでした。

今回の行動全体を通じて、今を生きていることは決して当たり前ではないと強く実感しています。多くの尊い犠牲の上に今日の沖縄・日本の社会があり、自分が存在しています。私の母方の祖父も戦争を体験した世代であり、当時は呉海軍学校に駐屯し、出撃することなく終戦を迎えました。この幸運がなければ今の私は存在していません。生前、祖父は戦争の話を語りたがりませんでした。その沈黙の背景にある過酷な状況を、沖縄の地で改めて深く理解できました。

多くの犠牲と奇跡的な命のつながりのもとにある平和の尊さを心に刻むと同時に、自分の家族や周りの仲間へ語り継いでいくことが、当たり前ではない今を生きる私たちの責任だと考えます。







2026 平和行動 in 沖縄

構成組織

2026平和行動in沖縄に参加した。私にとって、沖縄の地を訪れるのは今回が初めてであった。全体を通して、学校の教科書だけでは決して得られない「現地の空気感」を肌で感じられたことが、何よりも貴重な経験となった。

特に、印象深かったのは、二日目に訪れた糸数壕（アブチラガマ）だ。一歩足を踏み入れると、光の届かない暗闇と、肌にまとわりつく重苦しい湿気に圧倒された。ガマの中には当時の痕跡が今もしっかりと残っており、かつてこの場所で多くの人々が恐怖に晒されながら命を繋いでいたという事実に、言葉を失うほどの衝撃を受けた。ガマの中で参加者全員が懐中電灯を一斉に消した時の「漆黒の闇」は決して忘れることができないだろう。

また、三日目に視察した普天間基地や平和祈念公園等は、ニュース等の報道でよく目にする場所だが、実際に足を運んだことで強い現実感を覚えた。過去の凄惨な歴史と、いまも続く現代の課題。これらは沖縄の地を実際に訪れたからこそ、ようやく自分事としての現実味を帯びて、胸に迫ってきたのだと感じている。



あの苦しい時代を生き抜いてくれた先人がいたからこそ、現在の日本があるのだと改めて強く実感した。この研修で得た学びと「肌で感じた感覚」を胸に刻み、今後の平和や安全保障の在り方について、現実を見つめながら、より一層関心を持ち続けていきたい。

最後に、参加者の方々と貴重な体験を共有し、語り合える機会を設けていただいたことに、心から感謝申し上げる。

2026 平和行動 in 沖縄

構成組織

今回のフィールドワーク、正直なところ、想像していたよりもずっと重くて、言葉にするのが難しいくらいです。ただの旅行や観光とは全く違う、心がずっとざわついているような感覚が続きました。

旧海軍司令部壕に入ったとき、あの張り詰めた空気に触れて、いきなり足がすくむような怖さを感じました。当時の人たちが抱えていた逃げ場のない苦しさや死への恐怖が、壁や空気を通して伝わってくるような気がしました。ひめゆりの塔でも同様で、当時の学生たちがどんな最後を迎えたのかを考えたとき、胸が苦しくて、ただただ自分の無力さに打ちのめされました。

特に忘れられないのは、アブチラガマでの体験です。明かりを消して真っ暗闇になったあの瞬間、自分がどれだけ平和な日常に守られていたのかを突き付けられた気がしました。あの闇の中で静かにしていると、ガマの中で亡くなった方々の絶望がすぐ隣にあるような気がして、怖くて仕方なかったです。

また、平和の礎に刻まれた膨大な数の名前を見たとき、それがただの数字として目に入らなくなりました。一人ひとりに私と同じような家族がいて、夢があって、大切にしたい日常があったはずだと、当たり前のことを改めて深く考えさせられました。

これまでは「戦争」という言葉を歴史の教科書の中の出来事のようにとらえていましたが、沖縄を自分の足で歩いてみて、それが今の自分たちの日常とすぐ隣でつながっていることなのだと実感しました。現地で感じた「二度とこんなことは繰り返してはいけない」という素直な気持ちは、ずっと心に留めておきたいです。今回沖縄で感じた温度感を、家族や友達にも少しずつ自分の言葉で伝えていけたらいいなと思っています。



平和行動 in 広島

日程：２０２６年8月5日（水）～7日（金）

人類史上初めて原爆が投下された広島。その核の悲惨さを誰もが知っているはずなのに、世界ではいまだ「核の抑止力」の名のもので核保有国が存在しています。悲劇が二度と繰り返されないよう、そして核なき世界を目指して、人類普遍の願いである恒久平和の実現のため祈りを捧げてきました。今もなお各地で戦争や紛争が起こっているこの世界で唯一の被爆国である日本は、８１年間戦争せずに平和を訴えてきました。連合静岡は世界平和の重要性を伝え続けます。



■参加者一覧　　※参加者属性は参加当時のものです。

号	区分	地域協議会名	氏　名	構成組織	単組名
1	団長	－			
2	団員	地協			
3	団員	地協			
4	団員	地協			
5	団員	地協			
6	団員	地協			
7	団員	地協			
8	団員	地協			
9	団員	地協			
10	団員	地協			
11	団員	構成組織			
12	事務局	－		連合静岡	－

団 長

広島平和行動を終えて

今回、何年振りかの広島平和行動に初の「団長」として参加することになり、記念館を含めて幾つかの発見をすることが出来た。参加者の方々とも時間を共有出来た事に感謝申し上げたい。

さて、日本では広島・長崎の原爆被害が語られることが多い。しかし、その惨状だけを切り取って語るだけでは、なぜそこに至ったのか、そして戦争が何をもたらしたのかを十分に理解することはできない。終戦の4年前、米国は日本に対し「ハル・ノート」を提示した。そこには、中国や仏印からの撤退、それまでの戦果や権益の放棄など、日本にとって極めて厳しい要求が示されていた。また、米国による石油禁輸措置は、資源に乏しい日本にとって死活問題であった。

当時の日本は、米国の要求を受け入れて戦果と占領地を放棄するか、それとも開戦して資源地帯の確保に向かうかという選択を迫られていた。そして結果として、日本は戦争への道を選んだ。

その結末はあまりにも悲惨であった。日本では約310万人が命を失い、米国でも約40万人が戦死した。数字だけを見ても、両国が払った犠牲の大きさと戦力差の現実がうかがえる。

米国が原爆を使用した理由については、戦争を早期終結させるため、米兵の犠牲を減らすためという説明がなされている。一方で、当時急速に勢力を拡大していたソ連に対し、圧倒的な軍事力を示す意図があったと指摘する説が存在する。

私は、広島・長崎の平和活動が訴える「核兵器廃絶」に何ら異論を持つものではない。しかし、原爆による死者が約23万人であった一方、戦争全体では300万人を超える日本人が命を落とした事実も忘れてはならない。その中には兵士だけでなく、何の罪もない子どもや高齢者を含む多くの市民がいた。

広島では、上空約600メートルで炸裂した原爆によって、一瞬のうちに数万人が命を失った。同年末までに約14万人が亡くなり、その後も放射線障害や後遺症に苦しむ被爆者が続いた。

しかし、悲劇は原爆だけではない。全国各地の空襲による犠牲、沖縄戦の惨禍、そして若者たちが片道分の燃料だけを積み敵艦へ突入した特攻作戦。今振り返れば、米国も正気を失っていたが、日本もまた正常な判断を失っていたと言わざるを得ない。

双方の指導者が下した決断によって、膨大な数の国民が命を失った。この歴史的事実は消すこともできないし、消してはならない。

人類はこの過ちを深く反省しなければならない。しかし現実には、現在もなお世

界各地で戦争が続いている。「核兵器を使わなければよい」という話ではない。戦争そのものが、人命を奪い、家族を引き裂き、人々の人生を破壊するのである。

広島で被爆体験を直接語ることができる語り部は、すでにわずかな人数になっていると聞く。81年前の実体験を語れる方々は、あと10年もすればほとんど残っていないかもしれない。

語られているのは兵士の物語ではない。何の罪もない子どもたちや市民が経験した、あまりにも痛ましい現実である。だからこそ、語り部の証言は今のうちに映像や記録として保存し、後世へ伝えていかなければならない。そして世界に向けて、核兵器がいかに非人道的で愚かな兵器であるかを訴え続けるべきだと思う。

今なお世界には、広島・長崎の悲劇を十分に知らない人々がいる。実際の証言や映像が持つ力は大きい。その記録に触れた人々の心に、核兵器の必要性ではなく、その廃絶への思いが芽生えることを願っている。



連合平和行動 in 広島に参加して

地域協議会

今回の参加を通じて、平和は過去の記憶として学ぶだけでなく、今を生きる私たちが自分の行動として受け継いでいくべきものだと強く思いました。



戦後 81 年が経ち、被爆者の平均年齢が 86 才となるなかで、今回お二人から直接被爆体験を伺うことができました。そのお話は、まるで昨日の出来事のように生々しく、言葉の一つひとつから当時の惨状が伝わってくるものでした。このような機会は、あと 10 年も経てば失われてしまうかもしれません。AIなどで記録を残すことはできるとしても、生の声として聞くことができる貴重な機会を与えてくださった関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。



現在の世界情勢を見ると、「広島や長崎の悲劇が二度と繰り返されることはない」とは言い切れない現実があります。また、国内の政治動向についても、平和を当然のものとして受け止めるだけでは済まされない状況にあると感じます。

「平和はほっとくとすぐ逃げてしまう。だからこそ行動を起こして、自分の手でしっかり捕まえておく」。平和であることは誰もが望むことですが、果たして自分自身はそのために行動できているのか。自分に何ができるのか。すぐに大きなことはできないかもしれませんが、平和に思いを馳せ続けること、自分の思いを代弁してくれる政治家を応援すること、そして今回の平和行動で得た想いを周囲に伝えていくことはできるはずです。この経験を一過性のものにせず、これからも平和について考え、行動するきっかけとして大切にしていきたいと思います。

広島で誓う不戦の決意と教育者の責務

地域協議会



８月６日という特別な日に被爆地・広島の地に立ち、「教え子を再び戦場に送るな」という教職員組合の決意が改めて胸に迫りました。二度と戦争の惨禍を繰り返してはならないと、不戦の誓いを深く刻む機会となりました。

被爆者の生の声を聞ける機会が限られていく中、「連合2026平和ヒロシマ集会」で切明千枝子様、「連合静岡平和学習会」で楽本勝子様から貴重な証言をお聞きしました。特に「平和記念公園は、多くの遺骨の上に盛り土をして作られている。『踏んでしまってごめんなさい』と思って歩いてほしい」という言葉は非常に重く、その言葉を思い出しながら実際に公園を歩いた体験は一生忘れないと思います。語られた悲劇の記憶は心を締め付けるものであり、亡き祖父母から聞いた戦争体験を思い返す機会ともなりました。

また、集会での高校生平和大使による堂々としたスピーチには胸が熱くなりました。入念な準備と平和への熱い思いがひしひしと伝わり、これほど頼もしい若者が育っていることに日本の未来への大きな希望を感じました。教育に携わる者として大きな歓びを感じるとともに、平和の尊さを時代へ引き継ぐため、学校現場で一層身を引き締めて生徒たちに向き合っていきたいと強く決意しています。





「2026 連合平和行動 in 広島」へ参加

地域協議会

労働組合の活動の一環として広島を訪問し、原爆ドームや平和記念公園の見学、被爆体験証言の聴講、平和祈念式への参加を通じて、平和の尊さについて改めて考える貴重な機会を得ることができた。

これまでにも戦争や原爆について学ぶ機会はあったが、実際に被爆地を訪れるのは今回が初めてであった。当時の痕跡を目の当たりにし、被爆者の方々の生の声に触れたことで、戦争や原爆の悲惨さ、そして被爆による苦しみをより身近なものとして感じることができた。特に、被爆者の方々が経験された想像を絶する状況や、その後も長きにわたり続いた苦難について伺い、平和な日常が決して当たり前ではないことを強く実感した。

また、今回の訪問を通じて、平和の大切さを次世代へ語り継いでいくことの重要性を改めて認識した。被爆者の高齢化が進む中、私たち一人ひとりが学んだことや感じたことを周囲へ伝え、記憶を風化させないよう努めていく必要があると感じた。

労働組合活動の根底には、誰もが安心して働き、暮らすことのできる平和な社会の存在が欠かせない。今回広島で学び、感じたことを忘れることなく、日常生活や職場においても互いを尊重し合い、平和の大切さを伝えていく行動につなげていきたい。



2026 連合平和行動 in 広島に参加して

地域協議会

８月５日から７日の３日間、連合平和行動in広島に参加しました。被爆地を訪れるのは初めてでしたが、平和公園の静けさや資料館の展示を目にし、戦争の悲惨さは「遠い過去の出来事」ではなく、確かに人々の人生を奪った現実であることをつよく感じました。資料館に並ぶ生活用品や証言の数々は、当時の暮らしが一瞬で壊れた事実を物語っており、胸が締め付けられました。被爆者の方々が残した言葉には、想像を超える苦しみと、それでも未来へ伝えようとする強い意志が込められており、その思いに触れたことで、平和を守る責任を自分自身のこととして受け止めるようになりました。



全国から集まった仲間との集会では、若い世代が積極的に平和活動へ取り組む姿が印象的で、平和への願いが確かに受け継がれていることを心強く感じました。式典での黙とうは、自分自身と静かに向き合う時間となり、平和の尊さを改めて考える契機となりました。最終日に伺った語り部の講話では、幼い頃の体験を語る姿から、言葉では表しきれない現実が伝わり、その重みが心に深く刻まれました。

戦争を知る人が少なくなる今、今回の経験を周囲に伝えていくことが、平和を守る一歩になると強く感じています。日常の中で平和の価値を忘れず、これからも向き合い続けたいと思います。

2026 年連合平和行動 in 広島

地域協議会

連合2026平和行動に参加するにあたり、参加前は過去に被災された方に対し『かわいそうだな、大変だっただろうな』という軽い考えしかありませんでしたが、連合静岡2026平和ヒロシマ集会や連合静岡平和学習会で実際に被爆を経験された語り部の方から当時の状況や原子爆弾の悲惨さを語っていただき、自分の考えの浅はかさを実感する思いになりました。自分が幼少期の頃を思い出そうとすると断片的な記憶であるのに対し、語り部の方は非常に詳細に、鮮明に覚えているようで、よほど強く辛い思い出であったことが想像されました。当時は学校も行けず、中学生から工場などで働かされた、また戦争に怯えながら生活をしていたと聞き、『今ある生活が当たり前でなはい』という思いになりました。今回、このような貴重な体験ができ、戦争は起きてはならない、核兵器はこの世から根絶すべきという気持ちが強くなりました。現在は被災経験者も減り、語り部の方も5名弱しかいなくなったと聞きました。この平和行動で学んだことは途切れさすことなく、私たちが未来へつないでいかなければなりません。この気持ちを忘れることなく今後の組合活動にも活かしていきたいと思います。



2026 平和行動 in 広島に参加させていただいて

地域協議会

今回、平和活動で初めて広島を訪れました。これまで８月６日は原爆が投下された日と認識はしていましたが、特別な感情を抱くことは正直ありませんでした。しかし、実際に広島を訪れ、平和記念公園や原爆資料館を見学する中で、８月６日が広島にとってどれほど特別な日なのかを肌で感じました。これからは決して他人事と捉えず、忘れないようにしたいと思います。

また、被爆された方から当時の生活や原爆によって起きたことを直接伺い、その言葉の重みに胸を打たれました。特に「平和はほっとくと逃げてしまう。だからこそ行動を起こして、自分の手でしっかり捕まえておくことが大切」という言葉が印象に残っています。

さらに、高校生平和大使の「最後の被爆者が亡くなりましたというニュースがながれるのも遠い未来ではない」という言葉を聞き、被爆者の方々の体験や平和への思いを次の世代へ受け継ぐ大切さを感じました。

今回の活動を通して、平和は当たり前にあるものではなく、一人ひとりの行動によって守っていくものだと学びました。今回感じたことを忘れず、家族や友人、職場の仲間等、身近な人にも平和の大切さを伝えていきたいと思います。



2026 連合平和行動 in 広島

地域協議会

今回の広島平和行動に参加し、改めて平和の尊さと、それを次の世代へ伝えていく責任の重さを感じました。平和記念公園でのピースウォークは残念ながら熱中症対策のため中止となりましたが、短時間ではありましたが、ユニオントラベルの方にご説明いただきました。原爆ドームや慰霊碑をはじめとするモニュメントを巡り、その一つひとつに込められた思いや歴史を知ることで、原爆が多くの尊い命と当たり前の日常を一瞬にして奪った現実を、より身近に感じることができました。また、平和祈念式への参列や資料館の見学、被爆体験を直接お聞きする中で、戦争の悲惨さは決して過去の出来事ではなく、今を生きる私たちが学び続けなければならないものだと強く感じました。特に、被爆された方やご家族が長い年月を経てもなお、その体験を語り継いでいる姿から、「伝えること」の大切さを学びました。一番心に残ったのは、高校生平和大使と語り部の方の「平和はほっとけば逃げていく。一人ひとりの行動が大切」という言葉です。この言葉を受けて、どんなに小さなことでも想いやりを忘れないで行動しようと思いました。最後に、今回感じたことを自分の中だけに留めず、職場や家族、次の世代へ伝え、平和について考えるきっかけを広げていきたいと思います。



2026 連合平和行動 in 広島

地域協議会

今回、初めて平和行動in広島に参加させていただき、大変貴重な機会を得たと強く感じました。原爆投下から81年が過ぎ、被爆者の方々が高齢化されている中で、2名の方から直接、被爆体験の証言を伺うことができました。そのお話は、私自身の中で「戦争とは何か」を改めて深く考えさせられる内容でした。

私がもともと知っていたことは、世界で唯一の戦争被爆国が日本であること、多くの方が亡くなられたという事実程度で、具体的な被害の実態についてはほとんど理解できていませんでした。

昭和20年8月6日、原爆投下の日。なぜか警報は鳴らず、広島市民はいつもと変わらない朝を迎えていたそうです。空からキラキラしたものが落ちてきて、「ピカッ」と光り、「ドン」と爆発したことから、市民は原爆を「ピカドン」と呼びました。何が起きたのか分からないまま、街は一瞬で気温4000度に達し、街は火の海と化し、無数の命が奪われました。被爆し全身にやけどを負った人々は、「お母さん、痛いよ、苦しいよ」と泣き叫び、その時にできた治療といえば、使い古した天ぷら油を塗ってあげる程度の、あまりにも限られたものだったそうです。目玉が飛び出し、皮膚がずり落ちるほどの重傷を負った人々は、それでも助けを求めて学校や病院の方向へと歩いていきました。「そこへ行けば何とかなるのではないか」という、わずかな希望だけを頼りに。全身が焼けつくように熱い彼らは水を求め、川へ次々と飛び込みました。しかし、急激な体温変化に耐えられず、瞬時にショック死してしまい、川は遺体で埋め尽くされたといいます。

戦争が終わっても、放射線を浴びた身体は二次被害に苦しみ続け、両親を亡くした子どもたちは深い悲しみと貧困の中で生き抜かなければならず、終戦後も戦争の傷跡は消えることなく続いていったそうです。証言の中で印象的だったのは、戦地には人だけでなく、馬・犬・猫など多くの動物も連れていかれていたという話でした。馬は人を乗せて最前線で使われる馬と、食料や荷物を運ぶ馬の2種類。犬は首にアルミ缶をつけて前線と後方の連絡係として、猫は船に出没するネズミの駆



除に使われていたそうです。戦争は、人間だけでなく、命あるすべての存在を巻き込んでいたのだと痛感しました。

　語り部の方が話された中で特に心に残った言葉があります。「小さい頃の思い出は、常にお腹がすいていたことだけ」「広島の地には、今も被爆された方々の遺体が眠っている。広島に来たときは、心の中で『踏んでごめんね』と思ってほしい」その言葉は、胸に深く刺さりました。

　現在、被爆体験を語り継ぐ語り部は5名にまで減少し、高齢化が進んでいます。近い将来、被爆者の方々はいなくなる。この事実を未来へ伝え続ける役割は、次の世代が確かに受け継いでいかなければならないと強く感じました。



2026 連合平和行動 in 広島

地域協議会

【ピースウォーク】当日は熱中症アラート発令に伴い、イベント自体は中止になりましたが、山下さんのガイドで原爆ドーム・爆心地・原爆の子の像・慰霊碑・平和記念資料館を案内頂きました。資料館を見学し、こんなに原爆が恐ろしいものだとは思いませんでした。約 4,000 度の爆風で一瞬にして人や建物を溶かし、14 万人の命を奪った。生き残った人は、目玉が飛び出し、顔や体の皮膚がボロボロになって垂れ下がり、誰なのかが判別できない状態。「熱い、助けて、水をください」と叫ぶ被爆者。喉が乾いて飲んだ川の水、内臓が焼かれた状態で即死。放射線が含まれていることなど知らずに飲んだ黒い雨や浴びた放射能による後遺症…それにより命を落としてしまった。家族を亡くした悲しみ、放射能による苦しみに耐えながら生きる。本当に地獄だと感じ、原爆の悲惨さを改めて痛感しました。
【平和ヒロシマ集会】平和ヒロシマ集会（1,739 人参加）では、折り鶴の献納、核兵器廃絶ニューヨーク行動の活動報告、被爆体験証言、若者からのメッセージなどがありました。被爆体験の語り部(切明さん)を聞いた中で、「平和はほっとくと逃げる、行動を起こして自分の手でしっかり捕まえる」という言葉が胸に刺さり、今の平和な世の中が当たり前ではないのだということ、「核兵器を打たない・持たない・作らない」をしっかりと後世に伝える必要があると思いました。また、切明さんは「広島の街の下には多くの被爆者がいる、歩く時には踏んでごめんね」と心の中で思いながら街を歩いている。皆さんもそう思って広島の街を歩いてほしい。その話を聞くまで、原爆ドーム周辺を歩いていた自分が何も考えずに被爆者を踏んで歩いていたことが、恥ずかしく申し訳ない気持ちでいっぱいでした。
【原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式】当日は炎天下の中、日本全国から世界各国から大変多くの方々が式に集まっており、こんなに平和を願う人がこの日この地に集まっていること、初めて知りました。また、タクシー運転手からこの日(8/6)は何十年も雨が降っていないと話を聞き、亡くなられた方々と平和を願う方々の想いが毎年の祈念式開催が継続出来ているのだと思いました。
【平和学習会】平和学習会では被爆を語り継ぐ会の桒本さんの体験を聞きました。原爆当時は、国による作物の売買禁止に伴い、配給を貰っての生活。桒本さんの子どもの頃の思い出は、「お腹が空いた」だけしかないと聞き、当たり前に食事を取っている自分は、先人の方々のお陰で今があると改めて痛感しました。離れ離れで爆心地近くに暮らすお母さん、本当に苦しんだお母さん…生きていて、再会出来て本当に良かったと思いました。
【最後に】私は、今回初めて平和行動に参加させて頂きました。大変貴重な経験をさせて頂き、企画・運営して頂いた事務局の方々には本当に感謝しかありません。この経験を核兵器廃絶署名の時などでしっかりと次世代へ繋げていきます。本当にありがとうございました。

平和を手放さないために

連合平和行動への参加は、今回が初めてだった。この旅では、二人の被爆体験者の方から話を聴くことができた。

広島へ行く前に、一人めの方の被爆体験の話が新聞記事に載っているのを読んでいた。記事の内容とご本人から聴いた内容は大きく変わらないはずだった。しかし、直接その声で語られる言葉からは、その時の苦しみや恐怖が伝わってきた。被爆された本人の言葉としてきちんと受け止めなければならないと感じた。

二人めの方は、戦争によって学ぶ機会や家族と過ごす時間を奪われた経験について話してくださった。私たちが日常の中で当たり前に過ごしている時間が失われることの深刻さを改めて認識した。戦争は人々に大きな犠牲をもたらすものであり、絶対に子どもたちをまきこんではならないという思いを強くした。

また、子どもたちに伝えたいことを伺ったときに、「何かを決める時には対話をすること」とおっしゃった。当たり前のことのように思えるが、その積み重ねが平和へつながっていくのだと、改めて感じた。

被爆体験者の方々の話から、平和は自然に続くものではなく、守り続けなければ失われてしまうものだと感じた。だからこそ、聴いたことを周りに伝えていきたい。そして、日々の生活の中で対話を大切にしながら、現場でできること、組合としてできること、自分にできることを続けていきたい。

平和行動 in 長崎

日程：２０２６年8月7日（金）～１０日（月）

千羽鶴を携え、「長崎を最後の被爆地に」と平和への祈りを込め、二度と核兵器が使用されないよう強く訴えてまいりました。

今回の広島、長崎の平和行動でも昨年と同様に「語り部講話」を行程に組み込み、参加したものでなければ聞けない貴重なお話を拝聴しました。

すでに戦後８１年。実体験をされた語り部となる方々の高齢化に伴い、歴史的事実をどのように後世に継承していくか？　今後の大きな課題です。



■参加者一覧　　※参加者属性は参加当時のものです。

号	区分	地域協議会名	氏　名	構成組織	単組名
1	団長	－			－
2	団員	地協			
3	団員	地協			
4	団員	地協			
5	団員	地協			
6	団員	地協			
7	団員	地協			
8	団員	地協			
9	団員	地協			
10	団員	地協			
11	団員	地協			
12	団員	構成組織			
13	団員	構成組織			
14	事務局	－		連合静岡	－

団　長

2026 連合平和行動 in 長崎に参加して

「2026平和行動in長崎」での被爆者講話は、私に戦争の本当の怖さを改めて考えさせる機会となりました。これまで徴兵制度や召集令状（赤紙）は、兵士を集めるための制度という程度の認識しかありませんでした。しかし実際には、その前に志願する人々がおり、それでも不足する兵士を集めるために徴兵制度があったことを学びました。

特に印象に残ったのは、学校で「敵は化け物だから殺さなければならない」と教えられ、子どもたちが竹槍で敵を突く訓練をしていたというお話です。当時の子どもたちが「早く自分もやりたい」と思っていたことに衝撃を受けました。戦争は単に爆弾や銃器によって命が奪われるだけでなく、人の命を奪うことが正しいとされてしまう恐ろしさがあると感じました。

また、被爆者の方が結婚や子育ての中で偏見や不安を抱えながら生きてこられたというお話から、被爆の影響は戦後も長く続いてきたことを実感しました。このような悲惨な歴史を二度と繰り返してはならないと思います。

戦後81年が経過し、被爆体験を直接語れる方々は年々少なくなっています。今回、実際に長崎を訪れ、話を聴き、遺構や資料に触れた者として、この事実を次の世代へ語り継ぎ、平和の大切さを発信していく責任があると強く感じました。



2026 年平和行動 in 長崎に参加して

地域協議会

今回、被爆81年連合2026平和長崎集会に参加し改めて核兵器廃絶と恒久平和への思いを胸に刻みました。

爆心地の下流で被爆者の血と亡くなった人の油の浮いた川の水を飲まざるを得なかった。

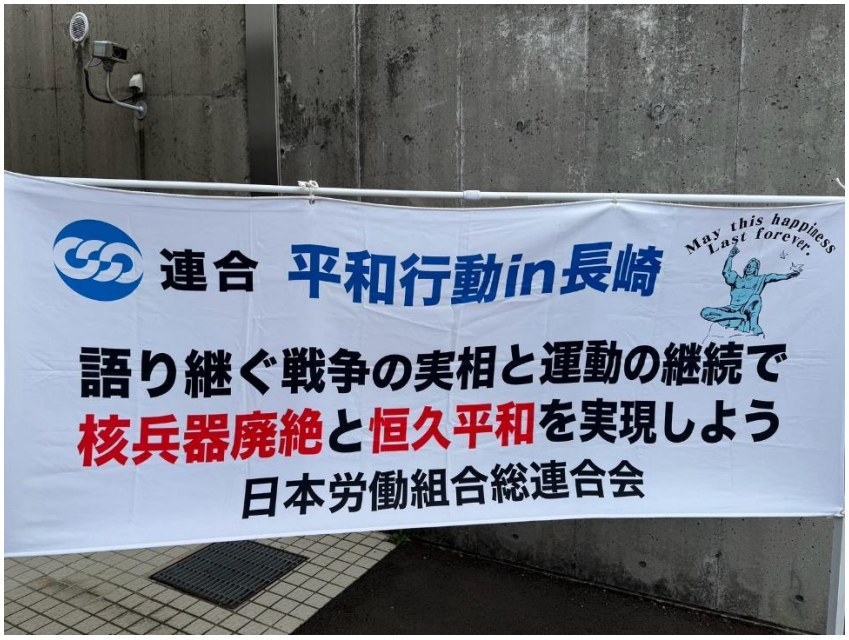
原爆資料館の展示や被爆者・語り部の方々のお話を通じ、戦争や核兵器が人々の日常や未来を一瞬にして奪う悲惨さを、より身近なものとして感じました。私たちが今暮らす平和は決して当たり前ではなく、多くの犠牲と努力の上に成り立っていることを改めて実感しました。

集会では、長崎大学の吉田様による「変わる国際秩序と核兵器」をテーマとした講演を拝聴し、世界的に核戦力が増加傾向にあることや、アジア地域における核兵器をめぐる情勢について学びました。

こうした状況だからこそ、唯一の戦争被爆国である日本には、核兵器廃絶に向けて国際社会に働きかける大きな役割があると感じます。

戦後81年を迎え、被爆体験を直接聞く機会が少なくなる中、私たちにはその記憶と証言を次の世代へ繋ぐ責任があります。今回の長崎で得た学びを職場や家族、仲間に伝え、一人ひとりが平和について考え、行動することを大切にしていきたいと思います。

最後に、連合静岡の仲間の皆さんとともに平和について学び、行動できたことに心より感謝申し上げます。この出会いと学びを今後の活動に繋げ、核兵器廃絶と平和な社会の実現に向けて、微力ながら取り組んでいきたいと思います。



長崎の過去と現在

地域協議会



今回、「2026 平和行動 in 長崎」に参加し、被爆地である長崎の歴史と現在の姿に直接触れることで、平和の尊さと記憶を次世代へ繋ぐ意義について深く考える機会を得ました。

心に強く残っているのは、語り部の方から直接お話を伺った時間です。これまでも教科書やメディアを通して原爆の恐ろしさを知っているつもりでいましたが、当時生きた方の生々しい体験談を聞き、被害の絶大な衝撃と残酷さを改めて認識させられました。言葉の一つひとつに宿る重みは、机上の学習では決して得られない切実なものでした。

また、ピースウォークでは、街中に点在する遺構や史跡を間近に見ることで、当時の悲惨な実情がより現実味を帯びて感じられました。なかでも、残された詩の中に描かれていた「水にはあぶらのようなものが浮いていた」という一節の背景を知った時の衝撃は忘れられません。このあぶらが、原爆の熱線によって溶け出した人間の脂肪であったという事実を突きつけられたとき、言葉を失うほどの激しいショックと、戦争がもたらす非人道性に対する強い悲しみを感じました。

一方で、現在の長崎の街を歩くなかで感銘を受けたのは、復興を果たした人々のたくましさです。81 年という年月のなかで、かつて焦土と化した街並みは悲惨な過去を感じさせないほど発展し、活気あふれる都市へと生まれ変わっていました。その力強い歩みに深い感銘を受けます。しかし同時に、どれほど街が新しく発展しようとも、その足元には忘れてはならない歴史があることを感じました。美しい都市景観のなかに、過去の痛ましい戦争の記録が大切に保存され、語り継がれていることこそが長崎の真の強さだと感じます。



過ちを繰り返さないためにも、長崎を最後の被爆地とするためにも、悲劇の記録を風化させず未来へと残し続けることの大切さを胸に刻み、今度は私自身が今回の平和行動で得た学びと感動を周囲へ伝えていきたいと思います。

長崎平和行動～思いをつなぐ～

地域協議会

今回、長崎で平和行動に参加し、被爆者の方から直接お話を伺いました。また、原爆資料館では被爆体験記集（黒本）を読む機会がありました。実際に被爆された方が、自らの手で綴った言葉に触れることで、原爆が多くの命や日常を一瞬にして奪い、その後の人生にも長く影響を与え続けていることを、より身近なこととして感じました。

特に心に残ったのは、体験記の中に「なぜ、つらい思い出をよみがえらせるようなことをするのか」という思いが、いくつも綴られていたことです。被爆者の方が自らの体験を語ることは、私たちが想像する以上に大きな苦しみを伴うのだと感じました。そのような中で、体験記を残してくださったことや、語り部として私たちに体験を伝えてくださっていることに、感謝の気持ちを抱きました。

今回の平和行動を通して、平和は決して当たり前ではないことを実感しました。被爆者の方々の思いを受け止め次の世代に伝えていくことが、私たちにできる大切な役割だと思います。教育に携わる者として、今回の学びを子供たちにも伝えていきたいです。

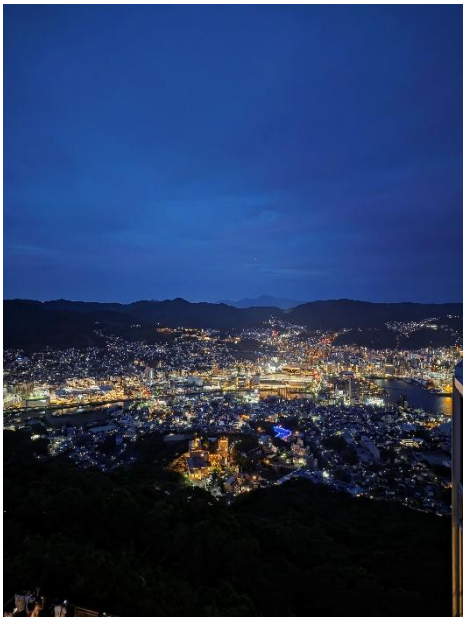




痛みの記憶から紡ぐ未来への誓い

地域協議会





長崎での４日間の平和行動は、凄惨な過去の痛みに深く向き合い、平和への責任を強く胸に刻む巡礼となりました。１日目に拝聴した今道氏の被爆体験講話は、戦争がもたらす命の極限の軽視や、戦後も彼らを不条理に苦しめ続けた社会的偏見という深い葛藤を浮彫にし、原爆が生涯にわたり人の尊厳を蝕む絶対悪である事を教えてくれました。

２日目の連合平和ナガサキ集会では、被爆体験証言で語られた「剥がれた皮膚を雑巾のようにぶら下げて歩く人々」の凄惨な姿や、アルマイトの弁当箱に残された「叔母の遺髪」の慟哭に胸を締め付けられました。またわずか１％の核使用でも地球規模の「核の冬」を招き、全人類が飢餓に陥れるという専門家の警告に背筋が凍りました。しかし、それに抗うように語られた長崎ユース代表団の言葉には確かな希望がありました。異なる立場の人々と向き合い論破するのではなく「対話」によって全員が合意できる共通点を泥臭く探し続ける彼女たちの真摯な姿勢に、次世代を担う主権者としての大きな覚悟を感じ、暗闇を照らす確かな希望の光であると感じました。

３日目は戦時遺構を巡るピースウォークで沈黙する被爆遺構の声なき叫びを全身で受け止め、夜には多くの被爆者が水を求めて命を落とした浦上川の川辺に手作りの万灯を並べました。暗闇のなか、川辺に美しく映り込み揺れる無数の光を見つめながら、犠牲者の魂に追悼を捧げ、二度とこの惨劇を繰り返さないと静かに、しかし固く心に誓いました。

この深く刻まれた長崎の記憶を胸に、私は単なる「平和を願う気持ち」だけで終わらせません。日常生活のなかでも、異なる意見を排除するのではなく、互いを尊重し粘り強く共通の地平を探る「対話」を地道に実践していきます。他者と繋がり、互いの思いを丁寧に紡ぎ合わせる行動こそが、長崎を最後の被爆地とし続けるための、確かな一歩になると信じています。

長崎平和行動～思いをつなぐ～

地域協議会

8/7～10の4日間、連合静岡 15名の団員として平和行動長崎に参加させていただきました。大変失礼ですが、私は今まで平和行動というこの活動自体知りませんでした。組合執行委員となり、組合活動を通じて、色々な経験をさせていただきながら今回の平和行動参加要請を受け、色々調べることができ、連合静岡の活動や団結力を知ることができました。

私は出身が熊本ですが、長崎に足を踏み入れたことは数回しかなく、今回の活動で内容の濃い長崎を経験しました。これまで個人的には広島の平和記念公園、原爆ドーム、資料館、鹿児島の知覧特攻平和会館を訪問しましたが、これからの日本を背負っていく若者達がお国の為といってこの世を去って逝ってます。長崎でもそういった若者達に加え、何の罪もない一般人を巻き込み多くの犠牲者が出ています。私の祖父はこの戦争で26歳という若さで戦死しています。父、母も幼いころに戦争を体験しています。他人事ではなく、実際の家族にそういった経験者がいて、幼いころから戦時中の体験談も聞いてきました。戦死した夫を持つ祖母（既に他界）は私からは想像できない辛い思いをして来たんだと思います。

今回、長崎を訪問することができました。実際に被爆された方の体験談を聞き、胸の内が熱くなりました。これから先、体験された方々のお話を聞くことが徐々に減っていきますが、原爆被爆国として若い世代に伝えていかなければなりません。平和行動でも丁寧に説明を受け、今まで違った解釈をしていた部分を知ることが出来ました。

戦争は、悲しみ、怒り、憎しみを生み、何一ついいことはありません。なぜ今も戦争しているのか？なぜ核兵器を持つ？核を持つ国が偉い？原爆投下されたらどうなると思う？その当時の日本がどうなったのか考えて欲しいです。唯一の被爆国としてこれからも世界に発信していき、戦争がない世界にしていきたいものです。

今回の平和行動ありがとうございました。そして団結力の高い連合静岡の今後のご活躍を期待しています。





2026 連合平和行動 in 長崎

地域協議会

私は連合平和行動に参加させていただくのは今回で２度目となります。

前回は三年前に沖縄に参加させていただきました。今回の長崎、平和ナガサキ集会に参加し、改めて平和の尊さと、戦争の悲惨さを次の世代へ語り継いでいくことの大切さを強く感じました。

特に心に残ったのは、被爆体験者の方から直接お話を聞いたことです。原爆が投下された当時の状況や、その後の苦しみについて、実際に体験された方の言葉で聞くことで、これまで知識として理解していた「原爆の悲惨さ」が、より身近なものとして感じられました。原爆によって多くの尊い命が失われ、その後も被爆された方々が長く苦しみ続けてきたことを考えると、戦争や核兵器は決して過去の出来事ではないと感じました。

また、被爆体験を語ってくださる方々の高齢化が進む中で、私たちがその思いを受け継ぎ、周りの人に伝えていくことが重要だと思いました。

今回の参加を通して、「長崎を最後の被爆地に。」という長崎市民の強い気持ちが感じられたと同時に、核兵器廃絶と恒久平和の実現に向けて今、自分にできることから行動していこうと思いました。



私たちの責任

地域協議会



今回初めて平和行動への参加の機会をいただきました。

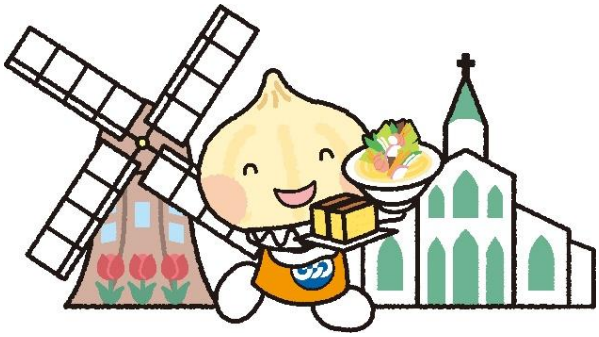
学校の授業等で長崎への原爆投下、その時の惨状については学んでいましたが、被爆体験語り部講話での今道様からの被爆体験を聴いたり、ピースウォークで原爆遺構や記念碑の説明を聴くことで核兵器の恐ろしさや戦争の悲惨さを身近に感じ、そして平和の尊さを感じることができました。

そんな貴重な体験をした平和行動の中で私が強く感じたのは、実際に戦争や原爆を体験した方々が、これから少しずついなくなってしまうという現実です。これからは私たちが、その体験や平和への思いを次の世代へ語り継いでいかなければなりません。

そのためには、まず多くの人が戦争や核兵器の問題に関心を持つことが大切だと思います。そして、関心を持ってもらうためには、私たち自身が積極的に情報を発信していく必要があると感じました。

現在、世界情勢は不安定で、再び戦争が起こる可能性も決してゼロではありません。核兵器が使用される危険もあります。唯一の戦争での被爆国である日本に生きる私たちは、核兵器がもたらす恐ろしさや悲惨さを世界に伝えていく必要があります。

今回の学びを自分だけの経験に終わらせず、組合としても戦争や核兵器の脅威について継続的に発信し、平和の大切さを一人でも多くの人に伝えていきたいと思います。



被爆 81 年、長崎から学んだ平和への思い

地域協議会

今回の平和行動では、被爆体験語り部による講話、専門家による講演、若者からのメッセージPeace Walkなどの活動を通じて、戦争の悲惨さや核兵器の脅威について改めて学びました。

長崎の街を歩き、戦争や核兵器の問題だけではなく「今の長崎の街と平和」について考える機会となりました。

長崎は大変坂道が多く、高齢者は車などの移動手段がなければ生活に不便な面もあるのではないかと感じる一方で、滞在中に利用した路面電車は、常に車内が込み合う場面もありましたが、高齢者に席を譲る姿や、乗客同士が互いに気遣う姿が見られました。何気ない日常の中に「支え合う心」に触れ、平和とは単に戦争が無いことではなく、人と人が思いやりを持って暮らせる社会そのものなのだと感じました。

被爆から81年。長崎の街には、過去の悲劇を乗り越えながら、歴史を大切にし、未来に向かって歩み続ける人々の強い思いがありました。しかし世界では今なお核兵器を保有する国が存在し、核兵器の脅威が続いています。核兵器が1度使用されれば、多くの命だけではなく、人々の日常や未来までも奪うことになります。

だからこそ、核兵器を「必要なもの」という考えを変え、核兵器のない世界を実現するために、私たち一人ひとりが声を上げ、行動をし続けなければいけません。

唯一の被爆国である日本には、被爆者が伝え続けてきた「二度と同じ悲劇を繰り返してはならない。長崎が最後の被爆地」という願いを受け継ぎ、世界に発信していく責任があります。今回、若者から発せられたメッセージの中に「微力だけど無力ではない」という言葉がありました。一人の力は小さくても、平和を願う声が仲間と繋がれば大きな力になります。

いつの日か、この世界から戦争と核兵器がなくなり、誰もが安心して暮らすことのできる平和な社会が実現することを願っています。

最後になりますが、今回ご一緒させて頂いた15名の皆さんは、優しくて思いやりのある素晴らしい仲間でした。4日間ありがとうございました。



～平和行動 in 長崎に参加して～

地域協議会

今回、連合が取り組む「平和行動in長崎」に参加し、現地でしか触れることのできない貴重な体験と多くの学びを得ることができました。

まず、「被爆者の講話」では、当時の過酷な生活環境や疎開先へ向かう道のり、そして爆心地近くで親友を亡くされたという痛切な実体験をお聞きしました。教科書や資料の中だけでは知ることのできない生々しい当時の様子に触れ、戦争と原爆がもたらした悲劇のリアルさを、身をもって学びました。

続く「平和集会」では、連合長崎を中心に長崎の原爆被害を契機とした平和を訴える活動が、長年にわたり継続されている重みを実感しました。世界各国における核兵器保有の現状を学ぶとともに、高校生や大学生といった若い世代が戦争の悲惨さを深く学び、自ら平和行動に取り組んでいる姿に強い感銘を受けました。



広島から受け継がれたピースフラッグが長崎を経て根室へと繋がれていくプロセスを通じ、連合全体が一体となって平和を考え、未来へ向けて広める活動の大きな意義を実感しました。

また、「ピースウォーク」では、爆心地周辺や平和公園を中心に今なお残る被爆遺構を巡りました。慰霊の像をはじめとする実物を目の当たりにすることで、核兵器の破壊力と被害の凄まじさが強く印象に刻まれ、平和への誓いをより一層深いものとしました。



日がおちてからの「万籠流し」では、現地関係者の皆様の手によって毎年丁寧に行われている取り組みに触れました。地元の小学生たちが平和への願いを込めて描いた絵やメッセージが記された灯籠が川を囲むように並び、その幻想的で神秘的な光景は、集まった一人ひとりに平和の尊さを改めて考えさせる静謐な空間を作り出していました。多くの人々が集い、一人ひとりの手で灯籠を並べることで、命の尊厳と平和への思いを次世代へ継承するための重要な意味を持っているのだと痛感しました。

今回の「平和行動 in 長崎」を通じ、過去の悲劇を風化させず、一体となって平和を訴え続けることの大切さを学びました。長崎で感じた強い思いを胸に刻み、今後も一人ひとりが平和に対して意識を持ち、周囲に伝えていく活動を実践していきたいと思います。

平和行動を終えて

地域協議会

私にとっては初めての平和行動参加でした。ほとんど長崎の事前知識の無いままで出発しました。

あるものと言えば、子供の頃、親に連れて行ってもらった「この子を残して」という映画くらいです。長崎医大の教授の視点で原爆日からの時系列を追ったこの映画は子供ながらにショッキングな映像もあり、よく覚えています。原爆資料館の最後のコーナーに少しこの教授のことも取り上げられていたので、懐かしく思いました。

連休明け、単組のみんなにお土産を配りながら、出張報告をしたのですが、台風の影響で軍艦島クルーズをキャンセルしてしまったこと、万灯流しと言っても灯篭を川沿いに置くだけだったこと、平和祈念式典には参加しなかったことなど、平和行動初参加だったのでそのあたり私自身も理解していなかったので、拍子抜けした部分もありましたが、他はとても充実した研修となりました。

特に、ピース・ウォークと原爆資料館は、改めて原爆のことを知ることができ、知見を広めることができました。

6月に志太榛地協で沖縄に研修に行きました。同じ戦争であっても、手段(3ヶ月間の地上戦・原爆で一瞬)が全く異なるために、私の頭の中では別物と判断してしまっていますが、それぞれどちらも悲惨な戦争、二度と繰り返してはならないものです。

実際に体験した方が、いなくなってしまった今、どう継承し、後世に伝えていくかが今後の私たちの使命だと思います。

こういった研修を通し、一緒に同行していただいた仲間たちの結束が今回は大変私にとって宝となりました。組合役員をやっていると、いろいろな研修をさせていただきます。その多くの研修の中でも、今回平和行動の仲間たちは、とても打ち解けることができました。

その点でも自分にとって充実した4日間を過ごすことができ、本当に皆さんには感謝いたします。特にユニオンの　　さん、　　団長、誘っていただいた地協の議長には本当に感謝いたします。企画運営の連合の方々にもお礼申し上げます。

ありがとうございました。

2026 連合平和行動 in 長崎

構成組織

体験を通して、戦争の悲惨さや実相を正しく理解し、その記憶を後世へ語り継いでいくことが、平和な社会を築くために欠かせないことであると改めて強く感じることができました。職場や家庭をはじめ、さまざまな場面で平和を願う思いを自分の言葉で語り継いでいくためには、私たち一人ひとりが平和について学び、考え、感じる心を持ち続けることが大切であり、このような機会をいただけたことに感謝しています。

今道さんの被爆体験語り部講話から、被爆後も不安や葛藤と向き合いながら歩んでこられた道のりの深さと、何よりも命の尊さについて次の世代に伝えていきたいという強い信念を感じました。また、松本さんの被爆者の訴えからは、当時3歳だった松本さんの中には、サイレンの音や戦闘機の爆音、だいだい色の強い光の記憶が今も鮮明に刻まれていることが伝わってきました。その記憶の鮮烈さに触れ、戦争が人々の心に残した傷の深さを改めて実感しました。

今回お話を伺う中で、特に心に残ったのは、ご本人の言葉で語られた当時の暮らしの様子でした。食べ物や配給の話、当時の家族の心境など、日々の生活について具体的に聞くことで、資料や映像だけでは伝わらないその時代の実情を、より身近に感じることができました。また、ご本人の表情や一つひとつの言葉から当時の不安や苦しみ、さまざまな感情が伝わり、戦争を自分ごととして考えるきっかけにもなりました。被爆者が高齢化する中で、このような体験や思いを直接聞かせていただく機会は今後ますます難しくなります。現在はさまざまな情報を容易に得られる時代ですが、実際に経験された方から記憶や思い、その時代のリアルな実情を直接伺うことのできる機会は何にも代えがたく、その大切さを改めて実感しました。

研修前後でも、さまざまなメディアで、平和の取組みが取り上げられた報道に触れる機会がありました。戦時下の状況や当時の人々の思いを多様な形で次の世代へ伝え繋げようと努力している姿が紹介されていました。今回の研修で得た学びや経験を自らのものとして終わらせるのではなく、自分の立場として、平和について考え、向き合うきっかけを作る役割を果たしていきたいと思います。貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。

～平和行動 in 長崎に参加して～

構成組織

この度、連合が長く歴史を重ねている「平和行動in長崎」に産別枠として参加してまいりました。被爆者語り部の講和、平和集会、ピースウォーク、万灯流しと数多くのプログラムを通じ、映像や書面では伝わらない、現地・実体験を適えることが出来ました。

特に印象深かったのは、ピースウォークで訪れた平和公園の中にある平和の泉のエピソードです。期間中、東シナ海に台風13号が発生しており、曇りがちで風が涼しく、歩くと少し汗ばむような気候の日でした。当日の午前中には長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が行われ、特設会場の解体工事が行われる中でのピースウォークとなりました。

連合長崎の方にご案内頂き、爆心地、瓦礫の積層、松山町防空壕群跡の見学を経て、平和公園のエスカレーターを上がっていくと現れる平和の泉。「まぁ、祈念公園だし噴水くらいあるよな」なんて心持ちで泉の前に立ち連合長崎の方の説明を聞きましたが、この4日間の中で最も心に響きました。「連合長崎のイベントとして、毎年清掃を行っている」「とにかく水を大切にしている」その理由には壮絶な背景がありました。

泉の前に碑石があり、そこには当時9歳の少女が被爆した時の手記から、「喉が渇いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくて、とうとうあぶらの浮いたまま飲みました」と刻まれています。熱くて熱くて、川を流れる水を飲もうとすると、そこには油が浮いている。それは、焼けた人から流れ出た油です。子供にそんな体験をさせてしまうのが戦争であり、原爆なのかと、強く実感しました。

いまだに戦争は無くなっていません。原子力は私たちの暮らしを便利に・快適にするエネルギー技術である反面で、人類を絶滅させるには十分な脅威でもあります。取り巻く国際情勢が早い流れで変化していく今だからこそ、過去の悲劇を未来につなげるために平和を訴え続ける事の重要さを学びました。今回の体験を周囲にしっかりと伝え、活動が連綿と続けられるよう支えてまいりたいと思います。
結びに、連合静岡の皆様、深い絆を作ることのできた15名の皆様、本当にありがとうございました。

平和行動 in 根室

日程：２０２６年9月４日（金）～7日（月）

連合は、北方領土の四島返還と日ロ平和条約の締結を求める運動を展開しています。歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の北方四島は、日本固有の領土です。しかし、第二次世界大戦～太平洋戦争終結時にソビエト（現ロシア）によって不法占拠され、住民は島を去ることを余儀なくされました。ロシアによる不法占拠は今に至るまで続いており、故郷を追われた元住民の方々は、お墓参りさえ自由にできない状態が続いています。

北方領土の早期返還、そして日ロ平和条約の締結もまた、安心して暮らせる平和な社会の実現に欠かせないものなのです。私たちは、今後も北方四島の早期返還に向け、返還運動に粘り強く取り組んでいきます。

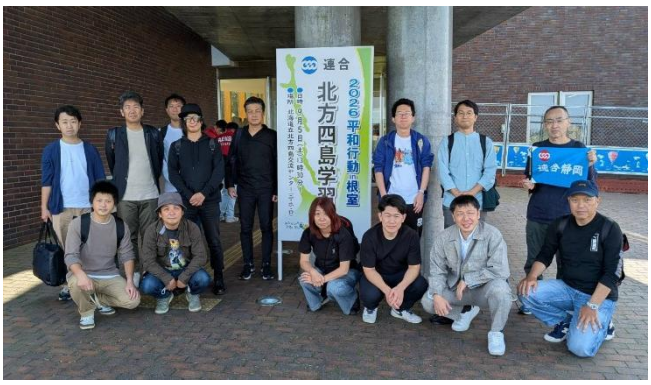


■参加者一覧　　※参加者属性は参加当時のものです。

号	区分	地域協議会名	氏　名	構成組織	単組名
1	団長	－			
2	団員	地協			
3	団員	地協			
4	団員	地協			
5	団員	地協			
6	団員	地協			
7	団員	地協			
8	団員	地協			
9	団員	地協			
10	団員	地協			
11	団員	地協			
12	団員	構成組織			
13	団員	構成組織			
14	事務局	－		連合静岡	－

団　長

一日も早い北方領土返還と自由訪問の実現を願って



平和行動に参加し、特に印象に残ったのは、学習会での「ふるさと北方四島への想い」と題した語り部の方のお話でした。戦後、島から追われるように、まるで荷物のように船へ乗せられ、根室へ強制的に引き揚げさせられたこと、その後の生活や現在の想いについて伺い、改めて元島民の皆さんが長年にわたり背負ってきた心痛の大きさを実感しました。

現在、元島民の皆さんの生存者数は約4,700人、平均年齢は90.5歳となっています。一日も早く、自由に故郷である島々を訪れることができる日が訪れることを願わずにはいられませんでした。

もう一つの講演である「北方領土の軍事的価値」では、Googleマップを活用しながら現在の状況を分析し、なぜ北方領土が現在のような状況に置かれているのかを、歴史的・地政学的な観点から学ぶことができました。これまで触れることの少なかった視点から北方領土問題を考え、外交交渉による双方が受け入れられる解決策はないものかと深く考える機会となりました。

今回、学んだことや感じたことについては、一人でも多くの方に伝えていきます。また、参加者の皆さんと交流を深め、それぞれの組織での取り組みや活動について意見交換ができたことも、大変有意義な時間となりました。このような貴重な機会をいただけたことに心から感謝申し上げます。

さらに、平和行動においても、より多くの女性が参加しやすく、多様な視点で平和について考えられる取り組みとして発展していくことも期待しています。



2026 連合平和行動~北方領土返還要求平和行動 in 根室に参加して~

地域協議会

今回、「2026連合平和行動~北方領土返還要求平和行動in根室」に参加し、釧路、厚岸、根室を訪れた。北海道の雄大な自然に触れる一方で、北方領土問題は資料や報道の中だけにあるのではなく、現地で暮らす人々の生活と歴史に深く結びついた問題なのだと実感した。なかでも、納沙布岬で聞いた「奪われてから81回目の夏を越えようとしている」という言葉が強く心に残っている。長い歳月が過ぎても故郷への思いを失わず、返還を訴え続けてきた方々の切実さが伝わってきたからである。また、「皆さんがここに来て、返還運動に参加してくれることが心強い」との言葉を聞き、現地に足を運び、当事者の声を直接受け止めること自体にも大きな意味があると感じた。

終戦時、北方四島には1万7千人を超える日本人が暮らしていたが、元島民は5000人となり、高齢化も進んでいる。体験を直接聞ける時間が限られている今、記憶と願いを次の世代へどう引き継ぐかは、重要な課題である。故郷を突然追われ、厳しい生活を強いられたうえ、日本に戻ってからも資産のない状態で暮らしを一から立て直さなければならなかった。その苦労を思うと、家族をもった今だからこそ、当時の方々が迫られた決断と覚悟の重さは計り知れないと感じた。

私は下田に十数年勤務し、北方領土問題に触れる機会も少なくなかった。「ジョバンニの島」を見たり、資料を読んだり、授業で取り上げたりする中で、自分なりに学んできたつもりだった。しかし今回、島を望む場所に立ち、当事者の声を直接聞いたことで、これまでの理解には、どこか「自分とは離れた問題」として捉えていた甘さがあったことに気づかされた。

今回の訪問で新たに知ったのは、墓参が現在中断され、日露関係の悪化も重なって、再開の見通しが立っていないという現実である。交流や自由訪問の機会も失われ、元島民の方々は故郷や先祖の墓を訪れることができない。北方領土問題は、地図上の境界線だけの問題ではない。故郷に帰れない人々が過ごしてきた時間、家族の記憶、そして生活の尊厳に関わる問題なのだと実感した。

根室周辺をバスで走ると、コンブ漁に向かう多くの船が目に入った。貝殻島周辺のコンブ漁は、日露間の民間協定に基づき、ロシア側へ入漁料を支払って行われているという。漁に向かう船や、地域の暮らしの一端を目の当たりにし、豊かな海がすぐ目の前にありながら、国際関係の影響を受け、安全への不安と隣り合わせで

涼を続けなければならない現実に、何とも言えないやるせなさを覚えた。同じ日本に暮らしていても、地域によって背負う不安や制約がこれほど異なることに、公平とは何かを考えさせられた。

今回の平和行動で得た最大の学びは、現地で見て、聞いて、感じたことを、自分の中だけにとどめてはならないということである。返還の実現には、一人ひとりが歴史と現状を知り、武力ではなく対話による平和的な解決を願い、その思いを次の世代へ伝え続けることが欠かせない。北海道から離れた場所にいても、今回出会った人々の言葉や目にした風景を、自分の言葉で伝えていきたい。教職に携わってきた者として、学ぶことと伝えることをこれからも大切にし、北方領土問題を身近な課題として考える人を少しずつ増やしていきたいと思う。

最後に、　　団長、　　局長、ユニオントラベル　　さん、そして参加されたみなさんと行動を共にできたこと、心から感謝いたします。



連合平和行動 in 根室に参加して

地域協議会



私はかねてより北方領土問題に関心があり、今回訪問させていただく前に、家族や会社の方々にこの問題を知っているかと伺ってみた所、詳しくは知らないし興味もないといった、同じ日本人でありながら対岸の火事とでもいうような意識を持たれている方がいるのに危機感を感じました。かく言う私も返還された所でどの様な価値を見出せるのかと朧げに思ってしまっている節がありました。しかし、元島民の方々の話を伺い、当たり前が突然なくなること、それが脅威をもって為されてしまった事に途轍もない恐怖を覚えました。自分が生まれ育った土地に帰りたいと言う純粋な感情からの訴えであるにも関わらず、為されずに81年も経ってしまっているという事実にやるせない気持ちになりました。

小泉准教授が語っていたように、ロシアとしては軍事面から地勢的な価値があり、今この緊張状態ではなかなか交渉に結びつくことができない、と言う事実は否定できないかと思います。ただ、時代が変われば思想も変わる可能性もあるので、時勢を逃さず政府には積極的な返還交渉を行っていただきたいと思います。私も情報発信といった自らできることは積極的に行いたいですし、集会で皆さんと誓った“がんばろう”を胸に平和を日々願っていきたいと思います。



2026 平和行動 in 根室に参加して

地域協議会

「近くて遠い故郷」 今回の平和行動の中で強く印象に残った言葉でした。

空も海も繋がっていて、島も肉眼で見えるほど近いのに…

今までの人生において北方領土問題について深く考える機会はあまりなく、新聞やテレビ報道などを通じて地図上の島々を取り戻したい。といった話だと捉えていました。今回、元島民の生の声を聴き、この問題に対する私自身の認識やイメージが大きく変わりました。故郷を追われた元島民の方々の思いや苦しみ、漁業関係者の生活や人生に大きな影響を与え続けていること、さらには北方四島が占領されてから80年以上の時が経過した今も先祖の墓参りさえも自由に出来ず、なお問題が未解決であることでした。

領土問題は国際的な政治的思惑や安全保障も関わり、非常に難しい問題で解決は一筋縄ではいかないと思います。元島民の平均年齢が90歳を超えた今、その思いや経験を次の世代へ継承していくことが重要な課題であり、返還要求運動の担い手が減少する中、この問題への関心そのものが薄れてしまえば解決への機運も失われてしまうため、問題解決までの残された時間はありません。だからこそ、私たち世代が現地を訪れ歴史や現状を学び、その思いを周囲に伝えていくことが重要だと思います。



今回の平和行動で学んだことを忘れることなく、今後も北方領土問題に目を向け、自分にできる形で平和運動に関わっていきたいと思います。

島民の思いを受けて

地域協議会

連合の平和行動に参加するのは初めてだったため、どのようなことをするのだろうと、とても興味深かったです。今回の会場は根室ということで、北方領土に関する平和行動を行うということでした。北方領土については授業で触れた程度だったので、正直そこまで詳しく分かっていないというのが本音でした。

古林さんや児玉さんの話から、戦後に実際ロシア兵と遭遇していること、北方４島から樺太への強制送還を経験していること、いまだに島に帰れていないことが分かりました。 今回、実際に根室の地を訪れ、元島民の方の話を直接聞いたことで、北方領土問題は単なる歴史上の出来事ではなく、今もなお続いている問題なのだと実感しました。教科書や資料で学ぶだけでは分からない、島を追われた方々の苦しみや、ふるさとに帰ることのできない無念さを、本人の言葉から聞くことができたことは、とても大きな学びでした。

平和行動を通して、これからの自分にできることは、今回の学びをもっと多くの人に伝えていくことだと感じました。ここで得た経験をこのままにはせず、意味のあるものにしていきたいです。



みんなが人間らしく生きているのに

地域協議会

私がこの平和行動に参加させていただいて特に驚いたことは、北方領土問題に直面している日本人もロシア人も、民間人は互いを分かり合おうとする姿勢があるということです。



学習会での元島民の古林さんと児玉さんの話では、共通して「ソ連兵に優しくしてもらえた」という内容が含まれていました。お二人とも島を追われたのが幼少期ということもあり、兵士もさすがに子どもにまでは辛い思いをさせられないという思いがあったのではないかと考えられますが、そもそも本当に人の心を無くしてしまった人であれば、子どもであっても優しくはできません。ソ連兵も、仕方なしの行動を取っていたのではないかと思いました。

また、コロナ前までは北方領土に住むロシア人と元島民との交流も行われていたことも知りました。交流の様子が分かる写真には、日本人とロシア人がとても楽しそうに交流している様子が写し出されていました。私はそれらの写真を見て、とても微笑ましく感じたのと同時に、なぜこんなに楽しそうにしているのに北方領土問題が解決しないのかと矛盾を強く感じました。



東京大学先端科学技術研究センター准教授の小泉先生の話によると、ロシアが北方領土を手放せないのは、冷戦時代からの流れで、米軍からのロシア本土襲撃を守ることや、互いに相手を確実に滅ぼせる軍事力を保有し牽制し合って平和の均衡を保つことが理由であるとのことでした。私はそれを知り、本当に悲しくなりました。

「自分の家に帰りたい」という思いは、人間として至極普通の感情です。私たちが当たり前にできることが、戦後からずっと叶わない人が多くいます。その願いが叶わずに高齢で亡くなってしまった人も多くいらっしゃるそうです。この北方領土問題を「主権問題」ではなく「人権問題」として捉え、日本政府からロシア政府に訴えていくことが重要であると考えます。同じ日本人として、「島民を家に帰してあげてほしい!」という声を全国から上げていくことが、日本にとってもロシアにとっても、人間らしく生きている人を守るために必要なのではないでしょうか。

2026 連合平和行動 in 根室に参加して

地域協議会

2026連合平和行動in根室に参加し、北方領土問題の難しさと切実さを感じました。学習会では元島民の方から「何故、目と鼻の先にある四島に帰れないのか。『帰りたい、帰りたい』と無念の思いを残して亡くなった先達をたくさん見送ってきた。せめて先祖の墓参りだけでもしたい。」という悲痛な思いと、先達の無念の思いを継いで返還運動を続けているというお話を聴くことができました。

戦後81年が経過し、元島民の方々の平均年齢も90歳を超えたと伺いました。残された時間は決して多くないのかもしれません。移動中のバスでユニオントラベル山下さんが話された「元島民の方に、直接お話を伺えるのはあと10年もないかもしれない。皆さんは大変貴重な体験をした。」という言葉が強く心に残っています。現地で生の声を聴いた参加者は、この歴史と元島民の皆様の思いを語り継ぎ、風化させないという使命を受け継いだ様に思います。

最後に、このような貴重な学びの機会を提供してくれた連合静岡と、共に活動した団員の皆さんに、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



納沙布岬で感じた「近くて遠い」現実

地域協議会

《語るたび その四島(しま)がまた 近くなる》

パンフレットの表紙に書かれたこの言葉が私の目に飛び込んできました。

この度「2026平和行動in根室」に参加し、北方領土問題と平和の大切さについて深く学ぶ機会をいただきましたので感想を綴ります。

小学生の頃、社会科の授業で北方領土を学びましたが、当時は地図帳の中の島々という程度の認識でした。あれから何十年もの歳月が経過し、その島々を自分の目で見ることになるとは想像もしていなかったことであり、現在もなお返還が実現していない現実に、あらためてこの問題の難しさと長期化している現状を実感しました。

北方四島学習会では、元島民の方々から故郷への想いや戦後の経験を伺い、その言葉からは故郷に戻れぬ悲しみだけでなく、「ふるさとを忘れず、後世へ伝えたい」という強い意志が感じられました。北方領土問題は外交や領土の問題として捉えられがちですが、その背景には多くの方々の人生や家族の歴史があることをあらためて学びました。

特に、元島民の方々の故郷への変わらぬ想いは私の心に強く突き刺さり、更に現在はビザなし交流や北方墓参なども中断されていると聞き、「墓参りもさせてもらえないの!?」と私の眉間がこれまで以上にシワが寄ったことは間違いありません。一日も早く北方墓参が再開されることを願わずにはいられません。

翌日の「2026平和ノサップ集会」にて納沙布岬に立った瞬間、まず驚いたのは北方領土との距離感でした。学習会やニュースでは何度も「北方領土」という言葉を耳にしてきましたが、実際に見た島は想像以上に近くにありました。納沙布岬から3.7Kmの位置にある歯舞群島の貝殻島は目視で確認でき、北方館の望遠鏡をのぞくと、島影だけでなく灯台や停泊するロシア船までもがはっきりと見えます。「こんなに近いのか」それが最初の感想でした。しかし同時に、「こんなに近いのに行けないのか」という思いも込み上げてきました。冗談



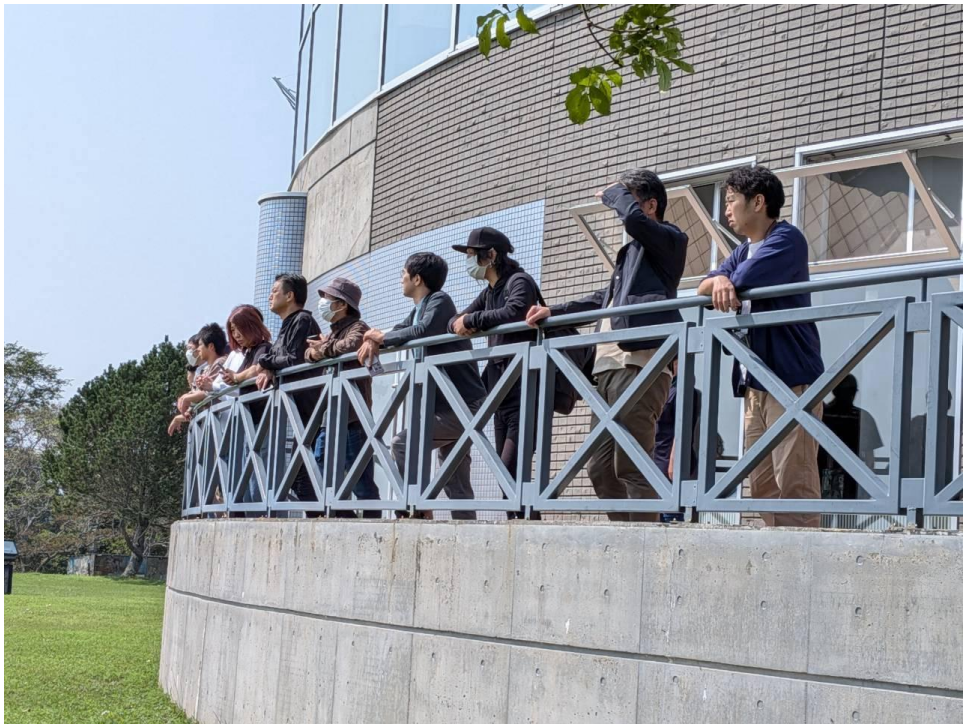
めかして「某人気漫画の主人公なら手がビューンと伸びて届くのではないか」と考えたほど近くに感じられる距離です。

しかし現実には、そのわずかな海峡が80年以上にわたり人々を故郷から遠ざけています。近いからこそ遠い。納沙布岬で感じた複雑な思いは、いまも心の中に残っています。実際に北方四島を望む地に立ったことで、平和の尊さと、この問題を風化させることなく次世代へ伝えていく重要性をあらためて認識しました。

今回の平和行動で得た学びを職場や組合活動の中で共有し、一人ひとりが平和や歴史について考えるきっかけづくりに努めていきたいと思います。

今回、大変貴重な経験をさせていただき、あらためて感謝申し上げます。

参加メンバーと　　局長との想い出とともに。



目の前にある帰れない島

地域協議会

この度、2026連合平和行動in根室に参加させていただきありがとうございました。

私は、恥ずかしながらこれまで北海道の地に行ったことがなく、せっかくの機会に北海道へ行きたいと思ったのが、正直なところでした。

初日、飛行機で北海道に到着し、一歩を踏み入れた時、初めての土地に降り立った満足感がありました。この思いが、今思えばこの平和行動の始まりでした。

参加した中で特に印象深かったのは古林貞夫氏の「ふるさと北方領土への尽きせぬ想い」の講演です。目の前に見える島に帰りたい。せめて墓参りをしたい。そんな話を聞いて、今の時代、行きたいところへ行けるものだと思っていた自分は無知だったと気が付きました。

どうか早く、元島民の方々の寿命が尽きる前に、課題解決に一歩でも近づいてほしい。希望が見えてほしい。と強く思いました。

いつか行きたいと思える場所は誰にもあります。でも、その場所が「行きたいけど行けない場所」「行くことが叶わない場所」と思って過ごしている人がいたなんて思いもしませんでした。

旅の帰り、北方領土を背にして思いました。元島民の方々は、私たちが故郷に帰る姿を見てどのように思うのか。元島民の方々の立場に立って考えたとき、帰っていくのではなく、また会いに来てくれると信じたいと思っているのではないか。私は、この地をまた会いにくる約束の場所にしたいと思いました。

私たちは、故郷へ帰ってからやることがあります。それは、北方領土の歴史を知り、知識を付け、今回であった方々のように、日々故郷へ帰りたいと願う人々がいることをより多くの仲間に伝えることです。

時間に猶予はありません。世界中のだれもがほんの少しの幸せを分かち合い、その幸せが皆を優しく包み込んでくれる世界を望んでいます。



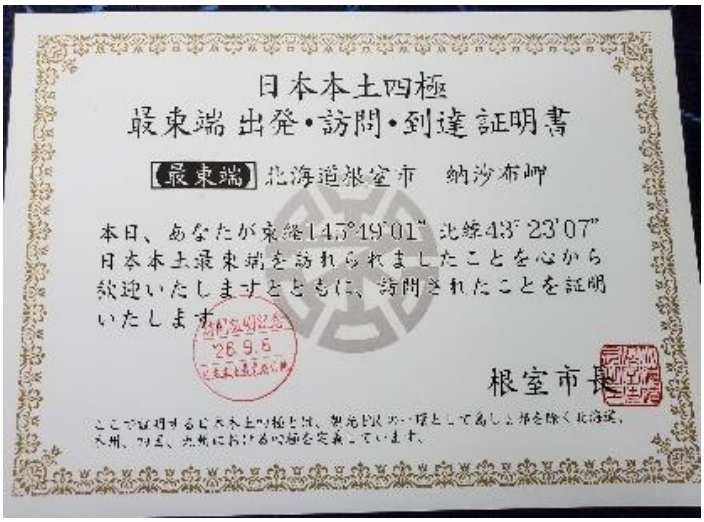




2026 連合平和行動 in 根室に参加して

地域協議会

9月4日から7日までの4日間、2026連合平和行動in根室に参加させていただきました。北方領土問題の歴史と現状を現地で学ぶことで、非常に貴重な経験となりました。


日本本土四極
最東端 出発・訪問・到達証明書
【最東端】北海道根室市　納沙布岬
本日、あなたが東経145°49'01" 北緯43°23'07"
日本本土最東端を訪れられましたことを心から
歓迎いたしますとともに、訪問されたことを証明
いたします。
26.9.5
根室市長

2日目には北方四島学習会にて、元島民の方々から「ふるさと北方四島への想い」を伺い、故郷を奪われた悲しみと、帰りたくても帰れない現実の重さを深く理解しました。また「北方領土の軍事的価値」についての講義では、ロシアが返還に応じない背景を地政学的観点から学び、領土問題の複雑さを実感しました。

3日目には納沙布岬を訪れ、「2026平和ノサップ集会」に全国の構成組織から約700名の仲間が集まり、返還実現への思いを共有しました。岬から北方領土やロシアの軍艦を望みながら、返還運動の歴史や島民の願いに触れることで、学習内容が一層現実味を帯びました。元島民の方々の平均年齢は90歳に達し、「せめて墓参りだけでも再開してほしい」という切なる願いは、一刻の猶予もない重みを持っています。

今回の平和行動を通じ、北方四島の早期返還と日ロ平和条約の締結の重要性を強く認識しました。当事者ではない私たち自身も北方領土問題を風化させることがないよう、今回学んだことを周囲に伝えていきます。



2026 連合平和行動 in 根室に参加して

地域協議会

今回、初めて連合の「平和行動in根室」に参加させていただきました。これまでもニュースなどを通じて北方領土問題を知っているつもりでしたが、実際には知らないことが多く、今回の学習会や集会を通じて、改めてこの問題の重さを感じました。

特に印象に残ったのは、元島民の方々が故郷を離れた後に経験された過酷な状況です。移動中や収容所での厳しい生活、さらには、亡くなったことが知られると海に遺体を下ろされてしまうため、冷たくなった家族の遺体を抱えながら移動せざるを得なかったという話を聞き、大きな衝撃を受けました。これまで私は、北方領土問題を「領土を返還してもらうための問題」として捉えていましたが、その背景には、突然故郷を失い、その後の人生にも大きな影響を受けた一人ひとりの深い苦しみがあることを強く感じました。

また、学習会では、ロシアが一時期北方領土への関心を薄めていたものの、ウクライナ戦争をきっかけに、その重要性を再び強く認識するようになったとの話がありました。ウクライナ戦争を契機に日露の平和条約交渉が止まり、さらに直近ではロシア大統領が北方領土を訪問するなど、解決に向かうどころか、さらに遠ざかっているように感じ、何とも言えないもどかしさを覚えました。

元島民の方々の高齢化も進み、当時の経験や思いを直接伝えられる方が少なくなっていることから、この問題はまさに時間との闘いだと感じます。今回の参加をきっかけに、北方領土に関するニュースにも以前より関心を持つようになりました。今回学んだこと、そして現地で感じたことを自分だけで終わらせず、周囲にも伝えていくことが大切だと思います。

最後に、このような平和行動に参加し、北方領土問題について改めて考える貴重な機会をいただき、ありがとうございました。



2026 年連合平和行動 in 根室について

構成組織

私は今回、2026年9月4日から9月7日にかけて、連合平和行動in根室に参加し、北方領土問題の経緯や現状、返還運動などについて学ぶことで、より身近な問題として捉える貴重な機会を得ることができました。

2日目の北方四島学習会では、元島民の方々のふるさと北方四島への想いと高齢化・減少が進む現状を聞き、問題をいつまでも先送りにできないという強い思いや解決されない苦しみ、悔しさが心に強く響きました。

また、元島民の方の講演の中で、占領下であっても日本人と移住して来たロシア人が、互いに助け合っていたという話はとても印象的で、それと同時に解決されない現状に対してとても歯がゆい気持ちで一杯になりました。

3日目の平和ノサップ集会では、700人を超える参加者と元島民の方からの訴えやピースリレー、集会アピールなどを通じ、北方領土返還に向けた決意を共有することができました。

北方領土返還運動発祥の地を訪れたこの経験を共有する機会を積極的に設けて、北方領土問題とその厳しい現状をより多くの人々に伝え、北方領土返還に向けたこの思いを次世代へ継承していきたいと考えます。



託された想いを胸に

構成組織

この度、漠然としか理解していなかった北方領土問題を学ぶ絶好の機と捉え、平和行動in根室に参加をさせていただきました。



9月5日に開催された北方四島学習会では、元島民の児玉泰子氏、古林貞夫氏から故郷への想いを伺いました。豊かな資源（昆布）に恵まれた生活、そして終戦後に不意に訪れた不条理。そこには傲慢な旧ソ連のエゴしか感じられません。また、「北方領土の軍事的価値」と題した講義を受け、我が国固有の地が軍事目的のため不法占拠されている事実を、広く国民に伝えるべきと考えます。



9月6日に歯舞諸島を背景に納沙布岬で開催された2026平和ノサップ集会では、返還に向けた決意を確認しました。竹島も含め、領土問題の解決が困難であっても、私たちはこの想いを引き継ぎ、粘り強く声を上げることが重要です。

今回の参加で、正面から領土問題に向き合うことができました。領土問題を、大戦により傷を負った沖縄、長崎、広島の歴史と同様に未来に語り継ぐべき課題と受け止め、平和な社会の構築に少しでも貢献できればと考えます。楽しかった参加役員との交流、極東の自然とのふれあいも含め、この機会をいただいたことに感謝すると共に、改めて平和行動への参加を希望します。

霞かかる空の下、納沙布岬から望む歯舞諸島は、極東の海に今も静かに佇んでいます。



みんなで考えよう　「平和」のこと